

要旨

「P トキニ Q」という形の文は、P で指定された事態が Q で指定された事態の発生する／した時を指定するというはたらきを持つ文である。

本論文では、さまざまなタイプの述語について、それを「P トキニ Q」という形の文で接続した場合の容認可能性を調べた。その結果、「P トキニ Q」が容認される場合の P と Q の時間関係には次の 3 種類があることが明らかになった：(i) Q が出来事を表し、P の表す事態の中に Q の表す事態が含まれるとき；(ii) Q が出来事を表し、P の表す事態と Q の表す事態が全く同時に起こるとき；(iii) Q が状態を表し、Q の表す事態の中に P の表現する事態が含まれるとき。特に、一見、容認不可能な文でも、文脈を付加し P と Q の時間関係を上記の 3 タイプのいずれかに解釈できるようにすると、「P トキニ Q」という文が容認可能になることを示した。

P トキニ Q

— 事態の順序と複文における時制解釈 —

言語学・応用言語学専門分野

1LT08150R

山田 和美

2008（平成 20）年入学

2012（平成 24）年 1 月提出

目次

1. 問題提起	1
2. 「P トキニ Q」の時間関係	3
3. 本論文の主張	5
4. Q が出来事を表す場合	6
4.1. P の表す事態の中に Q の表す事態が含まれる場合	6
4.2. P の表す事態と Q の表す事態が同時に起こる場合	7
5. Q が状態を表す場合	9
6. 文脈の設定による容認可能性の変化	11
6.1. Q が出来事を表す例の場合	11
6.1.1. 無標の時間関係が P→Q である場合	12
6.1.2. 無標の時間関係が Q→P である場合	15
6.1.3. 無標の時間関係が Q⊃P である場合	18
6.2. Q が状態を表す例の場合	21
7. 先行研究	24
7.1. 寺村(1983)	24
7.2. 工藤(1995)	24
7.3. 葉(2007)	25
7.3.1. 実現済みの事態の場合	26
7.3.2. 未実現の事態の場合	26
7.3.3. 一般的なきまり	27
7.3.4. 条件表現	28
7.3.5. 葉(2007)の問題点	28
8. まとめ	31
参考文献	32

1. 問題提起

「P トキニ Q」という文は、P で指定された事態が、Q で指定された事態の発生する、もしくは発生した時を指定する文である。例えば、(1)のような文を「P トキニ Q」構文と呼ぶ。

(1) 昨日太一君に会った時にお年玉を渡した。

(1)では「昨日太一君に会った時」がPであり、「お年玉を渡した」がQである。

さらに、(2)と(3)が示す通り、「P トキニ Q」という形の文でも「Q トキニ P」という形の文でも容認可能になる場合がある一方、どちらかが容認不可能になる場合がある。(2)は「P トキニ Q」の形でも「Q トキニ P」の形でも容認可能になる例である。一方で、(3)は「P トキニ Q」は容認可能だが、「Q トキニ P」は容認不可能になる例である。

(2) a. 私は幸せな時に死にたい。
b. 私は死ぬ時に幸せでいたい。

(3) a. 殺人事件が起きた時に通報した。
b. *通報した時に殺人事件が起きた。

(2)、(3)のとおり、「P トキニ Q」、「Q トキニ P」のどちらでも容認可能なものと、どちらかが容認不可能なものがある。(2)が「P トキニ Q」でも「Q トキニ P」でもどちらも容認可能である一方で、(3)の例では、「Q トキニ P」の(3b)が容認不可能である。このように「P トキニ Q」構文は、P と Q の内容によって、「P トキニ Q」と「Q トキニ P」が異なる容認性を示しうる。しかしながら、一見容認不可能に見える(3b)の文は(4)のように文脈を付加することで容認可能となる。

(4) こないだ、交通事故の現場に居合わせちゃった。被害者の人がかなりショックを受けてて、私が代わりに救急車呼んで通報までしてあげたの。その通報した時に殺人事件が起きたのよ。びっくりしたわよ、どんだけ治安悪いんだって話よ。

(4)を見ると、P と Q の事態にはどちらかが先に発生し、どちらかがその後起こるという確固たる順番があるのではないかと考えられる。例えば(3a)において、Q である「殺人事件が起きた」という事態は、P である「通報した時」の前に発生するのが妥当である。こ

のような順番の捉え方によって「PトキニQ」構文の容認可能性が変わりうるのではないかと考え、本論文では「PトキニQ」構文におけるPとQの時間関係について検証する。また、「PトキニQ」構文において、文脈によって容認性が変化する文ではどのような変化が生じているのかをあわせて検証する。この検証を通して、「PトキニQ」構文の容認性に対するPとQの時間関係の関与について少しでも明らかにしたい。

以上のことから以下の2つの問題に答えることを目指したい。

- (5) なぜ「PトキニQ」でも「QトキニP」でも容認可能な文のグループと、どちらかが容認不可能になる文のグループが存在するのか？
- (6) なぜ容認不可能な文でも文脈を与えることで容認可能になるのか？

次の章では、「PトキニQ」文におけるPとQの時間関係の可能性を整理する。

2. 「PトキニQ」の時間関係

まず、「PトキニQ」構文におけるPとQの時間関係を整理する。PとQの時間関係は、論理的可能性として、次の5つが考えられる。

- (7) $P \supset Q$:
Pの表す事態の中にQの表す事態が含まれる。
- (8) $Q \supset P$:
Qの表す事態の中にPの表す事態が含まれる。
- (9) $P = Q$:
Pの表す事態とQの表す事態が全く同時に起こる。
- (10) $P \rightarrow Q$:
Pの表す事態の中にQの表す事態が含まれず、Pの事態の後にQの事態が生起する。
- (11) $Q \rightarrow P$:
Qの表す事態の中にPの表す事態が含まれず、Qの事態の後にPの事態が生起する。

以下の例は、それぞれ(7)-(11)の時間関係を示したものである。(12)はPの表す「おなかがすいている」という事態の中に、Qが表す「ごはんを食べたい」という事態が含まれている。

- (12) (7)の例 :
おなかがすいている時にごはんを食べたい。

(13)では、Qが表す「反省の気持ちを強く持っていた」という事態の中に、Pが表す「捕まった」という事態が含まれている。

- (13) (8)の例 :
捕まった時に反省の気持ちを強く持っていた。

(14)では、Pが表す「くしゃみをした」という事態とQが表す「ちょうど花火が上がった

音がした」という事態がまったく同時に起こっている。

(14) (9)の例：

くしゃみをした時にちょうど花火が上がった音がした。

(15)では、Pである「辞世の句を詠んだ」という事態の後にQである「死んだ」という事態が生起している。Pの「辞世の句を詠んだ」という事態の中にQの「死んだ」という事態は含まれない。

(15) (10)の例：

*辞世の句を詠んだ時に死んだ。

(16)では、Qである「転んだ」という事態の後にPである「怪我をした」という事態が生起している。Qの「転んだ」という事態の中にPの「怪我をした」という事態は含まれない。

(16) (11)の例：

*怪我をした時に転んだ。

ではこれらの関係を使って、先に挙げた問題に対する答えを述べる。

3. 本論文の主張

本論文では、「PトキニQ」構文において、(17)、(18)のときのみ容認可能になることと、一度容認不可能と判断された文であっても、(19)の場合には容認可能になることを主張する。

- (17) a. Qの表す事態が出来事を表し、PとQの時間関係が $P \supset Q$ になっているとき（Pの表す事態の中にQの表す事態が含まれる場合）、「PトキニQ」という文は容認される。
- b. Qの表す事態が出来事を表し、PとQの時間関係が $P = Q$ になっているとき（Pの表す事態とQの表す事態が全く同時に起こる場合）、「PトキニQ」という文は容認される。
- (18) Qの表す事態が状態を表し、PとQの時間関係が $Q \supset P$ になっているとき（Qの表す状態が持続する時間の中にPの表す事態が含まれる場合）、「PトキニQ」という文は容認される。
- (19) 一見、容認不可能な文であっても、文脈を加えて、PとQの時間関係を(17)、(18)のように解釈することが可能な場合には、容認可能になる。

4. Q が出来事を表す場合

4.1. P の表す事態の中に Q の表す事態が含まれる場合

Q の表現する事態が出来事である場合、「P トキニ Q」構文の容認性には(17a)が関わっている。

- (17) a. Q の表す事態が出来事を表し、P と Q の時間関係が $P \supset Q$ になっているとき (P の表す事態の中に Q の表す事態が含まれる場合)、「P トキニ Q」という文は容認される。

Q が出来事を表す場合の「P トキニ Q」構文で、P と Q の時間関係が $P \supset Q$ になる文はすべて容認可能になる。以下の例は、Q の表す事態が出来事を表す例で、P と Q の時間関係が $P \supset Q$ のものであり、すべて容認可能になっている。たとえば(20a)の場合、「捕まりたい」が Q であり、出来事を表している。さらに「反省の気持ちが強い時」が P であり、P と Q の時間関係は P の事態の中に Q の事態が含まれており、(7)の $P \supset Q$ になっている。このとき(17a)で示すとおり、容認可能である。(20b)の場合も同様に、P と Q の時間関係は(7)の $P \supset Q$ になっている。このとき(17a)で示すとおり、容認可能である。

- (20) a. 反省の気持ちが強い時に捕まりたい。
b. 反省の気持ちが強い時に捕まった。

(21)-(31)も同様に、Q の表す事態が出来事を表す「P トキニ Q」という文の中で、P と Q の時間関係が(7)であるため、(17a)に示すように容認可能となっている。

- (21) a. すべきことがすべて終わった時に捕まりたい。
b. すべきことがすべて終わった時に捕まった。
- (22) a. 女盛りの時に初恋をしたい。
b. 女盛りの時に初恋をした。
- (23) a. あなたと一緒にいる時にご飯を食べたい。
b. あなたと一緒にいた時にご飯を食べた。
- (24) a. 彼が立ち会える時に赤ちゃんを産みたい。

- b. 彼が立ち会えた時に赤ちゃんを産んだ。

- (25) a. この靴を履く時に皇居を走りたい。
b. この靴を履いた時に皇居を走った。

- (26) a. 一緒にいる時に願いを叶えたい。
b. 一緒にいた時に願いを叶えた。

- (27) a. 私は幸せな時に死にたい。
b. 私は幸せな時に死んだ。

- (28) a. 作品が出来上がっている時に会いたい。
b. 作品が出来上がっていた時に会った。

- (29) a. 彼は 24 歳の時に死んだ。
b. 彼は 24 歳の時に死にたい。

- (30) a. 僕が忙しい時にあなたはそばで支えてほしい。
b. 僕が忙しかった時にあなたはそばで支えた。

- (31) a. 私が病気の時に彼がお見舞いに来てほしい。
b. 私が病気の時に彼がお見舞いに来た。

このように、「P トキニ Q」という文において、Q の表す事態が出来事を表す場合には、P と Q の時間関係が「P の表す事態の中に Q の表現する事態が含まれる」関係、つまり $P \supset Q$ となっていれば容認可能になる。

4.2. P の表す事態と Q の表す事態が同時に起こる場合

Q の表す事態が出来事を表す場合、「P トキニ Q」の容認性には(17b)が関わっている。

- (17) b. Q の表す事態が出来事を表し、P と Q の時間関係が $P = Q$ になっているとき (P の表す事態と Q の表す事態が全く同時に起こる場合)、「P トキニ Q」という文は容認される。

たとえば、(32)と(33)の容認性は(17b)に従っている。(32)の場合、「花火が上がった音がし

た」が Q であり、出来事を表している。さらに「ちょうどくしゃみした時」が P であり、P と Q の時間関係は P=Q、つまり(9)になっている。このとき(17b)で示すとおり、これらの例は容認可能である。たとえば、(33)の場合、「ちょうど彼の飼い猫が鳴いた」が Q であり、出来事を表している。さらに「彼の心肺が停止した時」が P であり、P と Q の時間関係は(9)の P=Q になっているため、(17b)で示すとおり、容認可能になっている。

(32) ちょうどくしゃみした時に花火が上がった音がした。

(33) 彼の心肺が停止した時にちょうど彼の飼い猫が鳴いた。

このように、Q の表す事態が出来事を表すもののうち、P と Q の時間関係が「P トキニ Q」という文における P の表す事態と Q の表す事態が全く同時に起こる、つまり P=Q の場合「P トキニ Q」という文は容認可能になる。

5. Q が状態を表す場合

ここでは、Q の表現する事態が状態の場合における「P トキニ Q」構文の容認可能性と、P と Q の時間関係について見ていく。

(18) Q の表す事態が状態を表し、P と Q の時間関係が Q \supset P になっているとき (Q の表す状態が持続する時間の中に P の表す事態が含まれる場合)、「P トキニ Q」という文は容認される。

たとえば、(34)の容認性は(18)に従っている。(34a)の場合、「反省の気持ちを強く持っていたい」が Q であり、状態を表している。さらに「捕まる時」が P であり、P と Q の時間関係は Q \supset P、つまり(8)になっている。このとき(34)は容認可能である。また、(34b)の場合、「反省の気持ちを強く持っていた」が Q で、状態を表し「捕まった時」が P で、P と Q の時間関係は(8)の Q \supset P になっている。このときも(18)で示すとおり、容認可能である。

- (34) a. 捕まる時に反省の気持ちを強く持っていたい。
b. 捕まった時に反省の気持ちを強く持っていた。

以下、(35)-(43)で、(34)同様に Q の表す事態が状態を表す場合における「P トキニ Q」構文の、P と Q の時間関係が(8)となっているため、(18)に示すように容認可能になる例を挙げる。

- (35) a. 捕まる時にすべきことがすべて終わっていてほしい。
b. 捕まった時にすべきことがすべて終わっていた。

- (36) a. 初恋をする時に女盛りでいたい。
b. 初恋をした時に女盛りでいた。

- (37) a. ごはんを食べる時にあなたと一緒にいたい。
b. ごはんを食べた時にあなたと一緒にいた。

- (38) a. 赤ちゃんを産む時に彼が立ち会えてほしい。
b. 赤ちゃんを産んだ時に彼が立ち会えた。

- (39) a. 皇居を走る時にこの靴を履きたい。
b. 皇居を走った時にこの靴を履いた。
- (40) a. 願いが叶う時に一緒にいたい。
b. 願いが叶った時に一緒にいた。
- (41) a. 私は死ぬ時に幸せでいたい。
b. 私は死ぬ時に幸せだった。
- (42) a. 会う時に作品が出来上がっていてほしい。
b. 会った時に作品が出来上がっていた。
- (43) 彼は死んだ時に 24 歳だった。

このように、「P トキニ Q」という形の文で Q の表す事態が状態を表すもののうち容認可能なものはすべて、P と Q の時間関係が $Q \supset P$ (Q の表す状態が継続する時間の中に P の表現する事態が含まれる) という関係である。

6. 文脈の設定による容認可能性の変化

ここでは、一見容認不可能な「P トキニ Q」構文でも、文脈によって容認可能に変えられる場合があることを示す。

- (19) 一見、容認不可能な文であっても、文脈を加えて、P と Q の時間関係を(17), (18)のように解釈することが可能な場合には、容認可能になる。

「P トキニ Q」構文が容認不可能となるのは、P と Q の時間関係が(17)と(18)で主張している時間関係になっていないためである。したがって、P と Q の時間関係が適切なものであると解釈する文脈を整えれば、容認可能な文となる。

6.1. Q が出来事を表す例の場合

Q が出来事を表す場合、主張(17)で述べた通り、P と Q の時間関係が $P \supset Q$ 、または $P = Q$ でない文は容認されない。例えば、(44)は Q が「死にたい」であり、出来事を表す文である。さらに、P が表す事態は「辞世の句を詠む時」であるため、(44)の文を「辞世の句を詠み終わったあとに死にたい」と解釈すると、P と Q の時間関係が $P \rightarrow Q$ になってしまうため、主張(17)の通り容認不可能になる。

- (44) *辞世の句を詠む時に死にたい。

また、(45)は Q が「願いを叶えた」という出来事を表している。P が表す事態は「お祝いする時」で、P と Q の時間関係は $Q \supset P$ になっている。この時も、(17)とは矛盾してしまい容認不可能になる。

- (45) *お祝いする時に願いを叶えた。

(46)は Q が「親が離婚してほしい」で出来事を表している。P は「僕が母親の方についていく時」で、P と Q の時間関係は $Q \rightarrow P$ となっている。このとき、(17)に従い、文は容認不可能になる。

- (46) *僕が母親の方についていく時に親が離婚してほしい。

以下、実際に例文を用いてどのように解釈を変えれば P と Q の時間関係が変化し、容認可

能な文になるのかを見ていく。また、例文の後にその例文における P と Q の時間関係を記した。

6.1.1. 無標の時間関係が P→Q である場合

まず、時間関係が P→Q の文が文脈を付加され、主張(19)に従って容認可能になる例を挙げる。まず(47b)について述べる。

- (47) a. 死ぬ時に辞世の句を詠みたい。P↔Q
b. *辞世の句を詠む時に死にたい。P→Q

(47b)の場合、「死にたい」が Q であり、出来事を表している。さらに「辞世の句を詠む時」が P であるため、P と Q の時間関係は P→Q、つまり(10)になっていると考えられる。このとき(17)の条件を満たさないため、容認不可能になる。しかし、(48)のような文脈を付けた場合、P と Q の時間関係が P↔Q だという解釈が可能となり容認可能になる。

- (47) b *辞世の句を詠む時に死にたい。

(48) 今度、すごく危険なスタントをすることになったの。もしかしたら死ぬかもしれない。出番は2回あって、ビルの3階から飛び降りるシーンと、ビルとビルの間を屋上から飛び移りながら辞世の句を詠むシーン。スタントマンはわたしの天職だと思っているから、万が一死んだとしても悔いはないわ。ただ、辞世の句を詠むシーンの方を憧れの人が見に来てくれるから、どっちかって言うならビルの3階から飛び降りるシーンより、辞世の句を詠む時に死にたい。

(48)では、「ビルの3階から飛び降りる時」と「辞世の句を詠む時」の2つの機会のうち、「辞世の句を詠む時」に死にたいと話し手は述べている。このように2つの機会が提示されることで、「辞世の句を詠む時」という時間指定が、「辞世の句を詠み始めて読み終わるまでの間の時間」という狭い範囲ではなく、「辞世の句を詠むあたりのシーン」という広い範囲として解釈可能になる。つまり(48)での「辞世の句を詠む時」という表現が表す時間の幅は、辞世の句を詠んでいるまさにその瞬間のことを指すのではない。例えば、辞世の句を詠み終わったあとに、ビルの飛び移りに失敗して死んだとしても、この状況では「辞世の句を詠んだ時に死んだ」という解釈が可能なのである。このように P の指定する事態の範囲が広がったことで、P は Q が指定した事態の「死にたい」を内包し、時間関係が P↔Q として解釈可能になり、この文は、容認可能となる。

以降、時間関係が P→Q の文が文脈を付加され、主張(19)の通り容認可能になる例を挙げ

る。

- (49) a. 彼は死ぬ時に辞世の句を詠んだ。P↔Q
b. *彼は辞世の句を詠んだ時に死んだ。P→Q

(49b)の場合、「死んだ」が Q であり、出来事を表している。さらに「辞世の句を詠んだ時」が P であり、P と Q の時間関係は P→Q、つまり(10)になっている。このとき(17)の条件を満たさないため、容認不可能になる。しかし、以下のように解釈を変えよう文脈を付加すると容認可能になる。

- (49) b *彼は辞世の句を詠んだ時に死んだ。

(50) 彼には食中毒になりたうち回って苦しみ、家族を呼んでお別れの言葉を交わしはじめた時と、癌で寝たきりになってから、もう今日こそは駄目だと本人が思って辞世の句を詠み始めた時の2回、死にそうになった時があった。一郎くんは、彼がご家族とお別れの言葉を交わしたときに死んだと勘違いしているようだが、それは違う。彼は辞世の句を詠んだ時に死んだ。

(49b)でも(48)と同様の変化が生じている。文脈付加によって P の指定する範囲が広くなり、P は Q が指定した事態の「死んだ」を内包できるようになる。その結果 P↔Q に時間関係が変化し、(17)に従って容認可能な文になったのである。次に(51b)について述べる。

- (51) a. 孫が生まれる時に私が命名したい。P↔Q
b. *私が命名する時に孫が生まれてほしい。P→Q

(51b)の場合、「孫が生まれてほしい」が Q であり、出来事を表している。さらに「私が命名する時」が P である。(51b)は、P である「私が命名する時」によって指定される時間があまりにも狭すぎて、Q である「孫が生まれてほしい」という事態を内包できずに(17)の条件に合わず容認不可になる。(51b)も(50)のように文脈を付け加えると、容認可能な文になる。

- (51) b. *私が命名する時に孫が生まれてほしい。

(52) 息子の嫁が妊娠した。もうすぐ念願の初孫が生まれる。周囲の人には幸せ真っ盛りねえと羨ましがられるが、そう幸せなことばかりではない。姑である私と息子の嫁

は仲が悪く、どちらが孫の名前をつけるかで揉めているのだ。初孫が生まれたときは祖母が命名するのが普通ではないのか。ごちゃごちゃと揉めている私たちに耐えかねて息子が口を出した。生まれる予定日のある週に、一日ごとに私と嫁が交互に孫の名前の案を出して行って、ちょうど孫が生まれた日に考えられた名前を付ければいいのではないかと、というのだ。あまり納得がいかないが、愛する息子が言うのだからしょうがない。願うは私が命名する時に孫が生まれてほしいということだけだ。

(52)でも、2つの機会が提示されることで、「私が命名する時」という時間指定が「私が命名の権限を与えられたその日」という広いものに変化している。時間指定の範囲が広くなり、PはQが指定した事態を内包することが可能になり、PとQの時間関係が $P \supset Q$ に変化したのである。よって主張(17)に従って容認可能となる。次に(53b)について述べる。

- (53) a. 孫が生まれた時に私が命名した。 $P \supset Q$
b. *私が命名した時に孫が生まれた。 $P \rightarrow Q$

(53b)の場合、「孫が生まれた」がQであり、出来事を表している。さらにPが表現する事態は「私が命名した時」である。(53b)は、Pである「私が命名した時」によって指定される時間があまりにも狭すぎて、Qである「孫が生まれた」という事態を内包できずに(17)の条件に合わず、容認不可能になる。しかし、(54)の文脈を与えることで容認可能となる。

- (53) b *私が命名した時に孫が生まれた。

(54) 国王夫妻は魔女に孫が生まれぬ呪いをかけられていた。呪いを解く方法はただひとつ、魔女よりも強い魔法使いが魔法を使ってその夫妻の孫の名前をつけることであった。魔法使いである私にはライバルがおり、その彼とどちらがより強い魔力を持っているかを、国王夫妻の呪いを解く事で明らかにしようという賭けをした。まず彼が国王夫妻の孫に名前をつけたが、孫が生まれる気配はなかった。次は私の番である。私が魔法を使って国王夫妻の孫に名前をつけた途端、あたりは光に包まれ、その光が消えるとそこにはひとりの赤ん坊がいた。そう、私が命名した時に孫が生まれたのだ!

(54)も(52)同様、2つの機会が提示されることで、Pの時間指定の範囲が広くなり、PはQが指定した事態の「孫が生まれた」を内包することが可能になっている。その結果PとQの時間関係が $P \supset Q$ に変化したため主張(17)に従って容認可能になったのである。

6.1.2. 無標の時間関係が $Q \rightarrow P$ である場合

次に、時間関係が $Q \rightarrow P$ となっているために主張(17)に矛盾し、容認不可能になっている文が、付加された文脈によって主張(19)の通り容認可能になる例について見ていく。まず、(55b)について述べる。

- (55) a. 親が離婚する時に僕は母親の方についていきたい。 $P \supset Q$
b. *僕が母親の方についていく時に親が離婚してほしい。 $Q \rightarrow P$

(55b)の場合、「親が離婚してほしい」がQであり、出来事を表している。さらに「僕が母親の方についていく時」がPであり、PとQの時間関係は $Q \rightarrow P$ 、つまり(11)になっている。このとき(17)の条件を満たさないため、容認不可能になる。

- (55) b *僕が母親の方についていく時に親が離婚してほしい。

(56) アカネちゃんのご両親の仲を取り持って、離婚する直前の彼らをつなぎ止めているのは誰でもない僕なのに、彼らの娘であるアカネちゃんはそのことをどうも有難がっていないようだ。まあどうせ僕はもうすぐ母親についてこの街を出る。彼女のご両親とももう会うことはなくなる。そうすれば彼らの離婚の日はずいぶんやってくるだろう。まあ今もかなり危険な状態であるけれども、どうせならもうちょっとの間アカネちゃんの親には辛抱してもらって、僕が母親の方についていく時に親が離婚してほしい、そうしたらアカネちゃんも僕の重要さに気づいて今までの非礼を詫びるだろう。

(55b)のように「親が離婚する」と「僕が母親の方についていく」ことを一連のつながりがあると解釈しては、 $Q \rightarrow P$ の時間関係のために容認不可能である。しかし、(56)では離婚した親は「僕」の親ではない。PとQが(55b)のような関係から変化している。そして、2つの期間からアカネちゃんの「親が離婚してほしい」時を選択するという文脈を与えることにより、Pの指定する時間の範囲が拡大し、Qの事態がPの指定する時間に含まれるようになる。よって、PとQの時間関係も $P \supset Q$ と変化し、(17)に従って容認可能な文になったのである。以降、同様に時間関係が $Q \rightarrow P$ の文が文脈を付加され、主張(19)に従って容認可能になる例を挙げる。まず(57b)について述べる。

- (57) a. 親が離婚した時に僕は母親の方についていった。 $P \supset Q$
b. *僕が母親の方についていった時に親が離婚した。 $Q \rightarrow P$

は、通報する時に殺人事件が起きてほしい。

(57b)の場合、「親が離婚した」が Q であり、出来事を表している。さらに「僕が母親の方についていった時」が P であり、P と Q の時間関係は $Q \rightarrow P$ 、つまり(11)になっている。このとき(17)の条件を満たさないため、容認不可能になる。

(57) b. *僕が母親の方についていった時に親が離婚した。

(58) アカネちゃんのご両親は…確か、僕の母親が父親に愛想を尽かして家を出ていった頃に離婚なさったと記憶している。あれ？違うかな、僕が両足を骨折して入院した時かな？アカネちゃんのご両親が離婚なさったという話は、彼女から手紙で聞いたんだ。僕は母親についていって一緒にあの街を出たから、彼女は手紙で知らせてくれたんだ。両足を骨折した時に離婚なさっていたのだったら、その時は僕もまだあの街にいたから、アカネちゃんから直接その話を聞いたはずだし。そうだ、思い出してきたぞ。僕が母親の方についていった時に親が離婚したんだ、アカネちゃん。

(58)においても(56)同様の変化が生じている。(57b)は $Q \rightarrow P$ という時間関係のために容認不可能になっている。しかし、(58)では2つの機会から1つを選択するという文脈を与えられている。すると、P の指定する時間の範囲が拡大し、Q の事態が P の指定する時間に含まれるようになる。このような解釈の変化によって、P と Q の時間関係も $P \supset Q$ と変化して、(17)に従って容認可能な文となったのである。次に(59b)について述べる。

(59) a. 殺人事件が起きる時に通報したい。 $P \supset Q$
b. *通報する時に殺人事件が起きてほしい。 $Q \rightarrow P$

(59b)の場合、「殺人事件が起きてほしい」が Q であり、出来事を表している。さらに「通報する時」が P であり、P と Q の時間関係は $Q \rightarrow P$ 、つまり(11)になっている。このとき(17)の条件を満たさないため、容認不可能になる。

(59) b. *通報する時に殺人事件が起きてほしい。

(60) この間食い逃げと殺人事件の現場に同時に居合わせちゃったの。食い逃げの通報をし終わってから殺人事件の現場を見ちゃったもんだから、通報を2回もするはめになったのよ。通報ってなんか自分の名前とか、電話番号とか言わなくちゃいけないじゃない？それを2回もよ。面倒くさかったわー。通報している間に殺人事件に遭遇していたら、そのついでに通報できたのね。ああ、今度こういう目にあうとき

(60)のように、通報と殺人事件が全く別個のものであると考え、語り手が、何か殺人事件とは別の案件で警察に通報している間に殺人事件が起きてほしいという趣旨の文だと考えれば、P と Q の時間関係が $P \supset Q$ に変化し、(17)に従い容認可能な文になる。次に(61b)について述べる。

(61) a. 殺人事件が起きた時に通報した。 $P \supset Q$
b. *通報した時に殺人事件が起きた。 $Q \rightarrow P$

(61b)の場合、「殺人事件が起きた」が Q であり、出来事を表している。さらに「通報した時」が P であり、P と Q の時間関係は $Q \rightarrow P$ 、つまり(11)になっている。このとき(17)の条件を満たさないため、容認不可能になる。

(61) b. *通報した時に殺人事件が起きた。

(62) こないだね、交通事故の現場に居合わせちゃった。被害者の人がかなりショックを受けてて、私が代わりに救急車呼んで通報までしてあげたの。なんと、その通報した時に殺人事件が起きたのよ。びっくりしたわよ、どんだけ治安悪いんだって話よ。

(62)のように、通報と殺人事件が全く別個のものであると考え、語り手が、何か殺人事件とは別の案件で警察に通報している間に殺人事件が起きたという趣旨の文だと考えれば、P と Q の時間関係が $P \supset Q$ に変化し、(17)に従い容認可能な文になる。次に(63b)について述べる。

(63) a. 願いが叶う時にお祝いしたい。 $P \supset Q$
b. *お祝いする時に願いを叶えたい。 $Q \rightarrow P$

(63b)の場合、「願いを叶えたい」が Q であり、出来事を表している。さらに「お祝いする時」が P であり、P と Q の時間関係は $Q \rightarrow P$ 、つまり(11)になっている。このとき(17)の条件を満たさないため、容認不可能になる。しかし、このお祝いと願いが叶うことを別個のものと考えれば、P と Q の時間関係が $P \supset Q$ に変化し、容認可能な文になる。

(63) b. *お祝いする時に願いを叶えたい。

(64) 私、生き別れた弟に会いたいという願いがあって、友達がみんなその願いを叶えるために協力してくれたの。だから私、協力してくれたみんなに恩返しをしたいって思いが強くて。何が一番恩返しになるかって考えたら、やっぱり私と弟が再会する瞬間をみんなに見てもらおうことだと思うのね。明日 A ちゃんの結婚お祝いパーティがあるじゃない？それが唯一、みんなが全員集まる機会なの。だから、私、お祝いする時に願いを叶えたい。それが、私がみんなに出来る唯一の恩返しなの。

(63b)で述べられている「お祝いする」ことは、「願いを叶えることができた」ことに対するお祝いではない。つまり、(63b)のような「願いを叶える」→「お祝いする」という順番に限らず解釈ができるようになってきている。(64)では A ちゃんのお祝いパーティ中に弟と再会するという願いを叶えるという解釈ができ、その解釈における P と Q の時間関係は P \supset Q となり、(17)に従って容認可能な文になるのである。次に(65b)について述べる。

- (65) a. 願いが叶った時にお祝いした。P \supset Q
b. *お祝いした時に願いを叶えた。Q \rightarrow P

(65b)の場合、「願いを叶えた」が Q であり、出来事を表している。さらに「お祝いした時」が P であり、P と Q の時間関係は Q \rightarrow P、つまり(11)になっている。このとき(17)の条件を満たさないため、容認不可能になる。

- (65) b *お祝いした時に願いを叶えた。

(66) お前の「大福がお腹いっぱい食べたい」って願いが叶った時のこと、覚えてないのか？サッカーの試合で優勝したお祝いパーティの時に後輩に用意してもらって、見事達成していたじゃないか。思いだせよ、お祝いした時に願いを叶えたじゃないか！忘れちゃったのかよ！

(64)同様に、(66)においても(65b)のような「願いを叶えた」→「願いの成就に対するお祝いをした」という順番に限らず解釈ができるようになってきている。(66)ではサッカーの優勝お祝いパーティ中に大福を一杯食べるという願いを叶えたという解釈ができ、その解釈における P と Q の時間関係は P \supset Q となり、(17)に従って容認可能な文になる。

6.1.3. 無標の時間関係が Q \supset P である場合

次に、時間関係が Q \supset P となって主張(17)に従い容認不可能になっている文が、文脈を付加されて主張(19)に従い容認可能となる例について説明する。まず(67b)について述べる。

- (67) a. うまく料理が出来た時に彼にほめてほしい。P \supset Q
b. *彼がほめてくれる時にうまく料理をしたい。Q \supset P?

(67b)の場合、「うまく料理をしたい」が Q であり、出来事を表している。さらに「彼がほめてくれる時」が P である。この場合、彼が褒めてくれる事象が「(話し手が)うまく料理をしたこと」だと考えると容認不可能になる。なぜならば、料理が完成しないと彼は語り手を褒めることは出来ないため、時間関係を P \supset Q または P=Q として解釈することは出来ず、(17)の条件を満たせずに容認不可能になる。しかし、以下のように解釈を変化させると容認可能な文になる。

- (67) b. *彼が褒めてくれる時にうまく料理をしたい。

(68) わたしの彼、すごい気分屋でね。機嫌が悪い時は何言っても何しても「ふーん」で済ませちゃう人なの。でも機嫌がいい時は別人みたいに人当たりが良くなって、例えばおいしい料理を振舞ってあげたら「おいしいよ！こんな料理を食べられる僕はなんて幸せものなんだ！ありがとう！」って具合にすごい褒めてくれるの。機嫌が悪い時はどうかって？砂噛むみたいにただ口動かすだけ。ああ、どうせなら彼が褒めてくれる時にうまく料理したいものよね。そっちの方が褒めてくれてお得なもの。

(68)においても、(67b)に比べて P の指定する時間が長くなるという変化が生じている。よって Q で示す事態が P の指定する時間の中に入ることが出来て時間関係が P \supset Q になる。すると主張(17)に従い容認可能になる。以降、時間関係が Q \supset P の文が文脈を付加され、主張(19)に従って容認可能になる例を挙げる。まず、(69b)について述べる。

- (69) a. うまく料理が出来た時に彼にほめてもらった。P \supset Q
b. *彼がほめてくれた時にうまく料理をした。Q \supset P?

(69b)の場合、「うまく料理をした」が Q であり、出来事を表している。さらに「彼がほめてくれた時」が P である。(69b)の文も(67b)同様、時間関係を P \supset Q または P=Q にとることは出来ない。よって(17)の条件を満たさず容認不可能になる。しかし、(70)のように解釈を変化させると、容認可能な文になる。

- (69) b. *彼がほめてくれた時にうまく料理をした。

(70) ある日、彼が私のことをきれいだよ、優しいね、と異様なほど褒め称えたことがあった。私も上機嫌になってしまって、その日の夕食はとてもうまくできた。このように、彼がほめてくれた時にうまく料理をしたことがきっかけで、彼は私のことをおだてれば何でもうまく出来る子だと勘違いしている。

(70)においても(68)同様、Pの指定する時間が長くなり、Qで示す事態がPの指定する時間の中に入ることによってPとQの時間関係がP⊃Qと変化し、主張(17)に従って容認可能な文になる。次に(71b)について述べる。

- (71) a. 電話する時に君への感謝の言葉を伝えたい。P⊃Q
b. *君への感謝の言葉を伝える時に電話したい。Q⊃P

(71b)の場合、「電話したい」がQであり、出来事を表している。さらに「君への感謝の言葉を伝える時」がPであり、PとQの時間関係はQ⊃P、つまり(8)になっている。このとき(17)の条件を満たさないため、容認不可能になる。

- (71) b. *君への感謝の言葉を伝える時に電話したい。

(72) 昨日は電話できなくてごめんね。今月の電話代がやばくて、今月はあと一回しか君に電話できないんだよ。実は明後日の君の誕生日に電話しようと思っていて、その時に今まで助けてくれたお礼を伝えようと思っていたんだ。なんの記念日でもない昨日電話するより、君への感謝の言葉を伝える時に電話したいなと思って、昨日電話出来なかった。申し訳ない。

(72)では「なんの記念日でもない昨日」と「君への感謝の言葉を伝える時」の2つの機会があって、後者の「君への感謝の言葉を伝える時」に電話したいと話し手は述べている。このように2つの機会が提示されることで、PはQが指定した事態の「電話したい」を内包できるようになる。その結果P⊃Qと時間関係が変化し、主張(17)に従って容認可能な文になる。次に(73b)について述べる。

- (73) a. 電話した時に君への感謝の言葉を伝えた。P⊃Q
b. *君への感謝の言葉を伝えた時に電話した。Q⊃P

(73b)の場合、「電話した」がQであり、出来事を表している。さらに「君への感謝の言葉

を伝えた時」がPであり、PとQの時間関係はQ⊃P、つまり(8)になっている。このとき(17)の条件を満たさないため、容認不可能になる。

- (73) b. *君への感謝の言葉を伝えた時に電話した。

(74) 僕が君に最後に電話したのはいつか覚えているかって？ そうだな…貸した金を返してくれて催促の電話をした時じゃないか？ え？ それは違うと思う？ えーと、思い出すからちょっと待ってくれよ…そうだ！あの時じゃないか？ 今年の夏頃、僕が君に助けてもらったことがあったろう、それに対してほんとにありがとうって電話口に僕が泣き崩れたこと覚えてないか？ そうだそうだ、君への感謝の言葉を伝えた時に電話したんだ。思い出したぞ！

(74)でも(72)同様、Pの範囲が広がったことで、PはQが指定した事態の「電話したい」を内包し、P⊃Qに時間関係が変化し、主張(17)に従って容認可能な文になる。

6.2. Qが状態を表す例の場合

Qが状態を表す場合、主張(18)で述べた通り、PとQの時間関係がQ⊃Pでない文は容認されない。例えば、(75)はQが「君の誕生日だった」であり、状態を表す文である。さらに、Pが表す事態は「僕が働いていた時」であるため、(75)の文を「僕が社員として働いていた数十年間の間ずっと君の誕生日だった」と解釈すると、PとQの時間関係がP⊃Qになってしまうため、主張(18)の通り容認不可能になる。

- (75) *僕が働いていた時に君の誕生日だった。

以下、同じように主張(18)に従って容認不可能になる例を挙げる。

- (76) *私が大学生だった時に空が晴れていた。

- (77) *女盛りの時に風邪をひいていた。

これらの文も、主張(19)の通り、文脈を与えてPとQの時間関係を変化させれば容認可能な文となる。では、具体的に、時間関係がP⊃Qとなっているために主張(18)に矛盾し、容認不可能になっている文が、付加された文脈によって主張(19)の通り容認可能になる例について見ていく。まず、(75b)について述べる。

(75) *僕が働いていた時に君の誕生日だった。P⊃Q

(78) え、君の誕生日がいつか知ってるかって？そんな大切な日、いくら僕でも知ってるさ。ええと…君の入学式の日、ちょうど誕生日だったんじゃない？あ、ちがうの。あっそうだ、こないだ僕一日だけバイトしていたじゃない。その日でしょう？あたり？やっぱりそうだ、僕が働いていた時に君の誕生日だった。

誕生日は1年に一度だけなので、働いている間じゅう誕生日が続くとは考えられず、(75)の時間関係は Q⊃P とはならず容認不可能になる。しかし文脈が付加された(78)では、「僕」は何年間も働いているわけではない。(78)では「僕が働いていた時」の期間が短くなっており、(75)で考えられる P の時間よりも短くなっている。P の期間が短くなったことで、P は Q の指定する状態が持続する時間の中に含まれることが可能になり、P と Q の時間関係が Q⊃P となって容認可能になる。次に(76)について述べる。

(76) *私が大学生だった時に空が晴れていた。P⊃Q

(79) 2020年頃から地球は、晴れの日が10年続き、次に雨の日が10年続くという変な天候に変化してしまった。私が大学生だった時に空が晴れていたから、小学生の時は雨が降っていたんだろう。

(76)の P は「私が大学生だった時」、Q は「空が晴れていた」で Q は状態を表す。大学生である期間にずっと晴れの日が持続するとはまず考えられないため、(76)の時間関係は Q⊃P とはならず、主張(18)に従って容認不可能になる。しかし、文脈が付加された(79)では「空が晴れていた」状態が10年続くという異常な天候が生じており、Q の状態が持続する時間が(76)よりも長くなっている。Q が長くなったことで、P が Q の指定する時間の中に含まれることが可能になり、P と Q の時間関係が Q⊃P となって、(18)に従って容認可能になる。次に(77)について述べる。

(77) *女盛りの時に風邪をひいていた。P⊃Q

(80) 僕、高校の文化祭の時に女装したことがあるんです。一日だけだったんですけど、まあ言うなればそれが僕の人生における唯一の女盛りの時ですよ。だって女の子だった時なんてその一日だけしかないんですから。まあ、その女盛りの時に風邪をひいていたんですけどね。化粧は取れるわ鼻声になるわで散々でしたよ。風邪でさえなかったら結構いい線いってたと思うんですけどね、僕の女装。

(77)は P が「女盛りの時」、Q が「風邪をひいていた」で Q が状態を表す文である。女盛りの期間にずっと風邪を引いているとは考えにくいから、(77)の時間関係は Q⊃P とはならず、主張(18)に従って容認不可能になる。しかし(80)で話し手は文化祭の開催中女装させられて、「女装中＝自分が唯一経験した女盛りの時」と捉え、その女盛りの時に風邪をひいていたと述べている。P の指定する時間が短くなっている。よって P が Q の指定する状態が持続する時間の中に含まれることが可能になり、P と Q の時間関係が Q⊃P となって容認可能になる。

7. 先行研究

時間表現に関する研究は、「トキニ」という表現と「トキニハ」という表現を比較しそれぞれの特徴を述べたものや、アスペクトについての研究など多々行われてきた。ここでは「トキニ」に重点をおいた先行研究を見ていく。

7.1. 寺村(1983)

寺村(1983)は、「P トキニ Q」という文は一回きりの事態を報告する場合にふさわしいと述べている。「P トキニ Q」という文の使用場面については、「Q という事態の発生が既知の情報であって、それがいつ起こったかが問題になっている場合に典型的に使われる」(寺村 1983, p.155)と述べている。例えば(81)は、Q である「カナリ激シイ地震ガアリマシタ」はすでに発生しており、地震がいつ起こったかが問題になっている文である。また、激しい地震は一回きりの事態である。

(81) キノウ、チョウド夕飯ヲ食べオワッタトキ (トキニ, *トキハ) カナリ激シイ地震
ガアリマシタ。 (寺村 1983:151(87))

(81)のように、「P トキニ Q」文は Q という事態がすでに生じており、それがいつ起こったかが問題になっている場合に用いられると寺村(1983)は述べている。

7.2. 工藤(1995)

工藤(1995)は、(82)のような、トキ(ニ)で結ばれた時間の従属複文のアスペクト研究を行っている。

(82) 青山先生は、倒れたときに産婦人科の病院にかつぎこまれたんですよ。
(工藤 1995:243, ④)

工藤(1995)は、トキ(ニ)で結ばれた時間の従属複文は、従属文のアスペクトと主文のアスペクトが相関することで、重複的同時性と接触的同時性の2種類の同時関係性が生み出されると主張している。

重複的同時性とは、(83)のように二つの出来事が時間的に重なりあっており、「トキ(ニ)」によってしか言い表せない関係性である。

(83) この前、ここを歩いている時、きみのことを思い出した。 (工藤 1995:242, ①)

一方で、接触的同時性とは、(84)のように二つの出来事の間で同一の時間帯における先行・後続関係が認められる関係のことである。この場合、「トキ(ニ)」は「マエ(ニ)」や「アト(デ)」などに置き換えられうる場合もある。

(84) 帰って裏門のくぐりを入る時、真知子は郵便箱を覗いて見た。 (工藤 1995:243, ③)

本論文では、2節で述べた通り、このような二つの出来事の時間関係を $P \supset Q$ や $P \rightarrow Q$ のように(7)-(11)で整理して述べている。

(7) $P \supset Q$:
P の表す事態の中に Q の表す事態が含まれる。

(8) $Q \supset P$:
Q の表す事態の中に P の表す事態が含まれる。

(9) $P=Q$:
P の表す事態と Q の表す事態が全く同時に起こる。

(10) $P \rightarrow Q$:
P の表す事態の中に Q の表す事態が含まれず、P の事態の後に Q の事態が生起する。

(11) $Q \rightarrow P$:
Q の表す事態の中に P の表す事態が含まれず、Q の事態の後に P の事態が生起する。

本論文において重複的同時性に該当する時間関係は(7)、(8)と(9)、接触的同時性は(10)と(11)である。

7.3. 葉(2007)

葉(2007)は、「トキニ」が実現済みの事態を扱う場合と未実現の事態を扱う場合とに分け、P と Q の関係性について述べている。また、「トキニ」と「トキニハ」を比較していく中で「トキニ」を用いるのが適さない場合を挙げている。「P トキニ Q」構文は一般的なきまり、条件表現は表現することができない。

7.3.1. 実現済みの事態の場合

葉(2007)は、「P トキニ Q」が実現済みの事態を扱う場合、Pは「Qがいつ発生したのか」という質問に対する回答を表すようなものであると述べている。

(85) 「前件は後件の事態に対し、それがいつ発生したのかを示し、当該事態が発生した出来事時を表示する役割を担っている」 (葉 2007, p.192)

以下の例は葉(2007)の主張によって説明可能な例である。(86)は昼食に葡萄ジュースを出した時に何が判明したという、すでに実現している事態を扱っている文である。前件である「昼食に葡萄ジュースを出したとき」が、後件である「それが判明しました」という事態が発生した時間を表示する役割を果たしているため、(85)に従って容認可能な文となっている。

(86) 「昼食に葡萄ジュースを出したときにそれが判明しました」 (葉 2007:192(10))

(87)も同様に(85)を満たす例である。

(87) ガールフレンドと複数形で言った時に、一瞬ニヤッとした。 (葉 2007:192(11))

7.3.2. 未実現の事態の場合

葉(2007)は、「P トキニ Q」が未実現の事態を扱う場合、Pは「Qがいつ発生するのか」という出来事の発生時間を具体的に指示する役割を担うと主張している。

(88) 「前件は後件がいつ発生するのかという出来事時を具体的に指示し、その時点で後件の事態を生起させようとする」 (葉 2007, p.192-193)

この場合、Pは発生がほぼ確実な事態、Qは意志的動作や聞き手に対する命令、指示を表す表現という組み合わせがほとんどであると述べている。以下の例は葉(2007)の主張によって説明可能な例である。(89)は、まだ発生していない事態についての文である。前件である「寮監がおまえをつれて医務室に行こうと廊下を通りかかったとき」が、後件である「俺たち二人が戸をたたく」事態がいつ発生するのかを具体的に指示している。よって(88)に従い容認可能な文となる。

(89) 「寮監がおまえをつれて医務室に行こうと廊下を通りかかったときに、俺たち二人が戸をたたく」 (葉 2007:192(12))

(90)も同様に(88)に従って容認可能な文である。

(90) 高速道路の最初の休憩所に着いたときに、電話してください。 (葉 2007:192(13))

7.3.3. 一般的なきまり

「P トキニ Q」は、一般的なきまりを表現することはできない。一般的なきまりとは、「同様の事態が反復的に発生することによって、前件の発生と後件の生起が一般化された関係」(葉 2007: p199)のことである。つまり、現在の習慣や過去の習慣などでない超時的な事態のことであり、文末にテンス変化は見られない。例えば「息を吸った時には肺が膨らむ」というようなものである。葉(2007)は、「一般的な決まりは時間軸に位置づけられない超時的な事態を表していることが分かる。超時的な事態を表していることから、時間軸に位置づけられる出来事時と関わらなくなるため、出来事時の設定を機能とする「トキニ」は不適切となる」(葉 2007: p200)と主張している。

(91) 「P トキニ Q」は時間軸に位置づけられない超時的な事態を扱うことができない (葉 2007: p200)

以下の例は(91)に従って容認不可となる文である。例えば(92)では、炭火が挙げられた時にはいつも再び進まなければならない。前件と後件は、前件が発生した時にはいつも後件が生起するという一般化された関係になっている。つまり時間軸に位置づけられない超時的な事態を扱っているのである。よって(91)に従って容認不可となる。

(92) *炭火がひとつ挙げられたトキニ、天候の悪くなる印と見て船を止め、二つ挙げられたトキニ安全になった印として再び進まねばならぬのだ。 (葉 2007:199(23))

以下、(93)と(94)も(92)同様(91)に従って容認不可となる文である。

(93) *「なあに、内密ばなしをするトキニ、却って(障子を)開けっぴろげておくものさ」 (葉 2007:199(24))

(94) *これによりメールが到着したトキニ自動的に指定の漢字コードに変換されます。 (葉 2007:199(25))

7.3.4. 条件表現

(葉 2007:201(28))

条件表現とは、益岡(1993)がおおまかに「後件（主節）で表される事態の成立が前件（条件節）で表される事態の成立に依存し、かつ、前件が非現実の事態を表すもの」（益岡 1993: p2）と定義しており、葉(2007)はこれを「前提として想定された非現実の事態が実現した場合、起こる結果を後件で述べる用法」（葉 2007: p201）と解釈している。葉(2007)によると、時制表現の文の中にもこの条件表現に似たものがある。(95)がその例である。

(95) ??彼はシュプールの跡を、なるべく真直ぐにするように心がけていた。いよいよ駄目だとわかったトキニシュプールの跡を追って引き返すのだ。 (葉 2007:201(28))

(95)を例に見ると、前件である「いよいよ駄目だとわかった」が想定された前提、後件である「シュプールの跡を追って引き返す」が前件が実現した場合に伴って生起する事態を表していて、条件表現に似通っている。「P トキニ Q」はこの条件表現を扱うことができない。なぜならば、P の発生が不確実で明確な発生時間を予想できない場合、P と Q は P が発生した時点で Q を生起させるという出来事時を指定する関係にならないからである。

(96) 「P トキニ Q」は、条件表現を扱うことができない。 (葉 2007: p202)

(95)では、P である「いよいよ駄目だとわかったトキ」は必ず発生するかはわからない。いつ発生するかも不明である。この場合、P と Q が「P が発生した時点で Q を生起させる」という出来事時を指定する」という関係にならず、容認不可能となる。(97)も同様に(96)に従って容認不可になる文である。

(97) ??もしあなたが我々の脅威になると判断したときに、私は躊躇せずあなたを捕まえます。 (葉 2007:201(29))

7.3.5. 葉(2007)の問題点

葉(2007)は、「P トキニ Q」は P の発生がほぼ確実な事態でなければならないと述べている。P の発生が不確実で、かつ明確な発生時間を予想できない場合には、P と Q は「P が発生した時点で Q を生起させる」という出来事時を指定する」という関係にならない。そのため、トキニの使用が不適切になると述べている。(93)と(94)は、P の発生が不確実で明確な発生時間を予想できないために容認不可能となる、葉(2007)が示している例である。

(95) ??彼はシュプールの跡を、なるべく真直ぐにするように心がけていた。いよいよ駄目だとわかった ”トキニ” シュプールの跡を追って引き返すのだ。

(93)の P は「いよいよ駄目だとわかった時」だが、これはいつ起こるのか予想はできない。また、絶対に駄目になると決まっているわけではない。よってトキニの使用が不適切となる。

(94)も(93)同様、P の発生が不確実で明確な発生時間を予想できないために容認不可となる例である。

(97) ??もしあなたが我々の脅威になると判断したときに、私は躊躇せずあなたを捕まえます。 (葉 2007:201(29))

しかし、(40)の例では、P の発生が不確実で明確な発生時間を予想できない場合であるにもかかわらず、容認可能な文として成り立っている。願いが叶う時など事前に予想できないし、叶うかどうか分からない。このように、(40)の P は発生が不確実で、明確な発生時間を予想できない。にも関わらず、(40)は容認可能となっている。

(40) 願いが叶う時に一緒にいたい。

また、葉(2007)は、P が発生した時点で Q が状態として持続している場合、トキニの使用は不適切になると述べている。この場合には P と Q が「Q の出来事時が P によって設定される」という時間的關係におかれていないからである。例えば(98)では、私がゆかりちゃんと出会う前にはもう、ゆかりちゃんは車イスに乗った生活を始めており、Q の発生した出来事時が P の発生時点に先行している。(99)では、姪の二人が歩けるようになるのは、今度おじさんと会うその瞬間ではなくそれより以前であろう。この場合も、Q の発生した出来事時が P の発生時点に先行している。

(98) *私がゆかりちゃんと出会ったときに、すでに車イスの生活が定着していました。 (葉 2007:197(19))

(99) 「おじさん帰るね。バイバイ。」と手を振ったら、姪二人でにっこり「バイバイ。」おじさんは泣きそうでした。*今度会うときに、きっともう歩いてるでしょう。 (葉 2007:197(20))

しかし、以下(100)-(103)の例文では、P が発生した時点で Q が状態として持続しているにもかかわらず、トキニの使用が不適切ということにはなっておらず、容認可能な文として

成り立っている。

- (100) 捕まる時に反省の気持ちを強く持っていたい。
- (101) 捕まる時にすべきことがすべて終わっていてほしい。
- (102) 私は死ぬ時に幸せだった。
- (103) 会った時に作品が出来上がっていた。

(100)-(103)はすべて Q が状態の場合の「P トキニ Q」文である。この場合、「P トキニ Q」文が容認可能になるのは P と Q の時間関係が $Q \supset P$ の場合であると主張で述べた。しかし、問題点として述べたように、Q の表す事態が状態を表す場合の「P トキニ Q」という文において、P と Q の時間関係が $Q \supset P$ であっても容認不可能になる文が存在する。この容認性の違いについて明らかにすることは今後の課題である。

8. まとめ

本論文では、「P トキニ Q」における P と Q の時間関係及び容認不可能な文が文脈によって容認可能になる過程について考察した。2章で提示した通り、「P トキニ Q」の P と Q の時間関係は、 $P \supset Q$ 、 $Q \supset P$ 、 $P = Q$ 、 $P \rightarrow Q$ 、 $Q \rightarrow P$ の 5 種類がある。本論文では、「P トキニ Q」構文について以下(5)-(6)の問題を提示した。

- (5) なぜ「P トキニ Q」でも「Q トキニ P」でも容認可能な文のグループと、どちらかが容認不可能になる文のグループが存在するのか？
- (6) なぜ容認不可能な文でも文脈を与えることで容認可能になるのか？

本論文では、この問題提起に対して、以下(17)-(19)の主張を提示した。

- (17) a. Q の表す事態が出来事を表し、P と Q の時間関係が $P \supset Q$ になっているとき (P の表す事態の中に Q の表す事態が含まれる場合)、「P トキニ Q」という文は容認される。
b. Q の表す事態が出来事を表し、P と Q の時間関係が $P = Q$ になっているとき (P の表す事態と Q の表す事態が全く同時に起こる場合)、「P トキニ Q」という文は容認される。
- (18) Q の表す事態が状態を表し、P と Q の時間関係が $Q \supset P$ になっているとき (Q の表す状態が持続する時間の中に P の表す事態が含まれる場合)、「P トキニ Q」という文は容認される。
- (19) 一見、容認不可能な文であっても、文脈を加えて、P と Q の時間関係を(17), (18)のように解釈することが可能な場合には、容認可能になる。

このように、「P トキニ Q」構文の容認性は、P が表す事態と、Q が表す事態の時間関係によって、変化している。また、どの時間関係が、影響しうるかは、Q の表す事態が、出来事であるか、状態であるかによって、異なるものである。

参考文献

- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』東京：ひつじ書房
- 寺村秀夫(1983)「時間的限定の意味と文法的機能」『副用語の研究』127-156. 東京：明治書院(『寺村秀夫論文集 I—日本語文法編—』(1993)再録. 東京：くろしお出版)
- 益岡隆志(編)(1993)『日本語の条件表現』東京：くろしお出版
- 葉 懿萱(2007)「「トキニハ」に関する一考察—「トキニ」との置き換えを通して—」『日本語文法 7 卷 2 号』188-204. 東京：くろしお出版